

手塚治虫の晩年の作品(『アドルフに告ぐ』等)を読む

3月上旬に左目の白内障手術をした。術後の目の安定を得て、眼鏡の調整ができるまで1ヶ月ぐらいかかるので、漫画なら読めると考え、手塚治虫の作品、特に晩年の作品を読むことにした。

1)『ルードウィヒ・B』

その最初が、手塚治虫の『ルードウィヒ・B』(潮出版社、1989年8月刊)だ。『ルードウィヒ・B』は、ベートーベンと、彼を生涯の敵と決めたフランツの物語である。フランツの出生には、謂れがある。(中略)かくてフランツは、父親の憎しみをわが身にうけ、声を奪われる、彼の悲鳴を、歓喜を、悲しみを、心を表現する原初の声を。」(萩尾望都の解説) 実にすばらしい作品だった。これが未完だったとは大変惜しい。

2)『ネオ・ファウスト』

手塚治虫の『ネオ・ファウスト』(朝日新聞社、1989年4月)。手塚が死んだのが1989年2月9日、60歳だった。『ネオ・ファウスト』は『ルードウィヒ・B』と同じく未完で、「朝日ジャーナル」の1988年1月より12月まで連載で、第二部は連載2回目で終わった。

1970年紛争下の大学で、生化学の世界的権威である一閑老教授が主人公で、そこにネオ・ファウスト(魔女)がからみ、「命の契約書」にサインをすれば、「お望み通りの人生を再生してあげます」と誘惑する。そして、話は大学紛争下の大学、ベトナム戦争下の日本社会の中で展開する。ゲーテの『ファウスト』を下敷きにした手塚ロマン最期の結晶だった。

死後すぐに出されたこの本には、息子の手塚真が「わが父・手塚治虫」で手塚の死の直前の様子(談)があるので、引用する。「もうそのときは昏睡状態でしたが、ときどきふっと意識が回復することがある。そのとき父は何を言うかというと、手を動かして『鉛筆をくれ』ってと言うんです。で、鉛筆を握らせると安心するんでしょうね。また意識がなくなる。その繰り返しでした。(中略)正月のころ、『もうすぐ治るから、退院したら今後のことを話そう』と言うんです。僕の方はもう長くない、とわかっていましたから、早く聞きたかったんですが…。最後まで、生き続ける、ということに何の疑いももっていませんでした。」

3)『アドルフに告ぐ』

先に読んだ『ルードウィヒ・B』と『ネオ・ファウスト』とは手塚治虫が亡くなった年に出版されたもので、当時購入していた。『アドルフに告ぐ』(全五巻、1988年～89年)は持っていなかったの、今回「日本の古本屋」サイトで購入して読んだ。

この話は3人の「アドルフ」が主人公で織りなされている。ひとり「アドルフ・カウフマン」で在神戸ドイツ領事

の息子、二人目は「アドルフ・カミル」で、ユダヤ人パン屋の息子でカウフマンの親友、最後はアドルフ・ヒトラーだ。1936年8月のベルリン・オリンピックから話が始まり、戦前、戦中と話が進んでゆく、壮大なドラマだ。圧巻は神戸大空襲とゾルゲ事件だった。最終巻まで読み進んで、感動したことがある。「やがてベルリンが連合軍の手に落ち、ヒトラーは自殺、ひとびとの運命を大きく変えた戦争も終わった。そして戦後、カミルはユダヤ人の悲願であるイスラエル建国にすべてを捧げ、カウフマンはユダヤ人によるナチス残党狩りから逃れながら、やがてパレスチナ解放戦線の組織に入る。いよいよ二人のアドルフの対決する時が来た。」(第5巻の扉より)手塚の視線が現在のパレスチナの状況をすでに見通していたのではないかと思わせるアクチュアルな展開であった。手塚の構想力が大変優れていることに深く感動させられた最終巻だった。

4)『陽だまりの樹』

手塚治虫著『陽だまりの樹』(全7巻、小学館)を読んだ。『ビッグコミック』(小学館)1981年4月25日号から1986年12月25日号まで掲載された。第29回(昭和58年度)小学館漫画賞青年一般部門受賞したものだ。幕末期の日本を舞台に、当時の開国、西洋文明と西洋人の流入からやがて続く倒幕、そして戊辰戦争という時代の流れの上で、対照的だが友情で結ばれた男(手塚の祖先に当たる蘭方医手塚良仙と想像上の人物である伊武谷万二郎)の人生を綿密に構成されたストーリーで描いている。手塚のルーツを辿りながら、幕末の日本を舞台に想像力を巧みに行使した手塚の快作だった。

5)『グリンゴ』

最後に読んだのは、高度経済成長期の商社マンを描いた『グリンゴ』(1994年6月、7月)だ。この作品は手塚の死によって、2巻目で未完に終わった。架空の国、南米リド共和国に赴任した商社マンを中心にした物語だ。彼はゲリラの根拠地にエレクトロニクスの部品に欠かせない希少金属=レアメタルの鉱床が眠っていることを発見する。そこから話は危機とカタストロフィに突入し、手塚のユニークなアイディアによりストーリーが展開する。

2巻目の巻末に石森章太郎が「手塚漫画の＜グリンゴ＞」という解説を書いている。石森はこの中で、晩年の作品よりも大阪の出版社で刊行された「初期作品」(単行本時代)がおもしろく、「あの単行本時代の作品の中にこそ、手塚治虫の全てがある、という思いである。」と書いている。彼が上げる初期作品とは、『新宝島』『メトロポリス』『ロストワールド』『ファウスト』『ふしぎ旅行記』『平原太平記』『来るべき世界』等である。そういう視点で初期作品を読み直してみるのもおもしろいかな、と思った。